

中国の新・世界戦略

—十二全大会と今後のゆくえ

非毛沢東化を進める中国。この潮流はソ連モデル重視の方向だ。再び中ソは、一枚岩、となりうるのか

なか じま みね お
中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授)



なぜ中国政治は重要か

九月初旬に開かれた中国共産党第十二回大会は、この時期にいわゆる教科書問題をめぐって日中関係が緊迫した状況にあっただけに、ひととき注目された。

しかも今回の第十二回党大会は、米中関係の冷却化、日中関係の緊張とともに、中国の対外路線が大幅に変化した状況下で開かれたのである。

今日の中国は、国際政治においてはまさに大國であるが、一方、一人当りのGNPは約二

五〇米ドル前後で、豊かき水産では世界約一六〇カ国のなかでも一三〇番目にも入らない。それでいて十億さらには十二億にのびる人口をかかえた最貧国でもある。

にもかかわらず、その中国の政治がなぜこゝろも重要な意味をもつかという問題の核心については、必ずしも十分な理解があるとはいえないようである。もしもこれが中国以外の國であったなら、一人当りのGNPが二五〇米ドル前後というような國の一挙手一投足が、これほど注目されることはあり得ないであろう。それは巨大な人口と膨大な国土の故

だけではない。経済的にはこれ程までに立ち遅れているが、なおかつ国際社会においては、アメリカをもソ連をも手玉にとり得るし、たまたま「戦略國家」であるからこそ、中国の存在がひととき大きくクローズアップされるのである。

したがって、そのような「戦略國家」中国の世界戦略を規定する中国国内政治のリーダーシップのいかんが、決定的に重要な意味をもつと考えてよいのである。換言すれば、中国内政が根本的な問題なのであって、中国の内政のいかんが中国の対外認識を決定し、中国

の世界戦略を規定する。それゆえに外部世界は大きく揺り動かされるのだといえよう。しかし同時に、これらの領域は、外部世界が周知からいらいそれを操作しようとしても、いかにともじがたいことを、われわれは知っておく必要がある。

かつて、中国に対するアメリカの基本的な戦略は、中ソを離間させることであった。しかしその中ソ離間策によって中ソは対立したわけではなく、まさに中国共産党の当時のリーダーであった毛沢東の対ソ認識が、中ソ対決をもたらしただけである。

このように見てゆくと、中国の政治の動き、中国共産党の動向は、今日依然として世界を動かしているとしても過言ではない。このような視点に立って中国の政治を見なすが、中国が世界に対して抱えるべき大きな問題の根本を理解することはできない。

今回の教科書問題についても、わが國の対応がいわゆる日中関係の枠組みの中のみ行われようとしているところに問題がある。中國がきわめて敵しい対日姿勢を表明しはじめたのは、中國の世界戦略の転換に基づいていると習わざるを得ないからである。それは中

國共産党のリーダーシップの体質が、非毛沢東化の潮流の中で大きく変化しているからであり、そうした状況の中で中国の政治が行われているからなのであって、問題は日中関係という固有の座標軸の中だけでは処理し切れないものがある。

そして、このような中国の対日姿勢の厳しさの根本については、わが國としても、いかにともじがたいのだ。中国の指導者は、中國がこう発言すれば、あるいはこういう手を用いれば、アメリカがどれだけ動揺するか、日本政府がどのように周章狼狽するかとかいった波紋を本能的に読み切つてゆくのである。この辺のところを、中国政治を見ていく上での鍵だといえよう。

非毛沢東化とは何か

では一体、中国政治の潮流は今日どのような方向にあるのだろうか。私は、ひと口に言つて、非毛沢東化を全面的に展開しようとしている——と考えている。では、非毛沢東化とは一体何であろうか。それはたんに中國政治においてかつてあれほど大きな役割を占めていた毛沢東の影響力を弱めることだと、か

毛沢東政治の極限形態であった文化大革命の政治的・社会的残滓を一掃することであると、さらにはまた毛沢東型社会主義のシンボルである人民公社を、解消することなどが、非毛沢東化なのではないことを確認しておく必要がある。

毛沢東的な政治の流れを否定するということは、毛沢東が否定しようとしたものが全面的に復権するという、いわばリアクションを伴った衝動であり、政治の逆転だといえるのである。では毛沢東が全面的に否定しようとしたものは何であったのか。それは中国共産党内では端的に言って、いわゆる実権派路線であり、いわば劉少奇路線である。中國が一九五〇年代後半以降、農業集団化政策を中心として築き上げてきた毛沢東型社会主義建設、つまり毛沢東モデルを根本的に否定したうえで、ついに劉少奇路線が全面的に復権したことは、今回の第十二回党大会の胡耀邦報告をしてみると、歴然としている。

しかも、劉少奇テーゼの復活とも報じられたように(本来、「劉少奇テーゼ」とは一九四九年十一月に劉少奇が提起したアジアの武力革命方式を指すのであり、このような報

じ方は限られている、従来の毛沢東型の、生産関係をまず改変することによって生産力を引き上げようという、いわば「大躍進」・人民公社方式ではなく、やはり生産力を高めることによって徐々に生産関係を變えていくという、よりオーソドックスな社会主義建設路線に、つまり四九年の建国から五〇年代前半の時期にまで中国の社会主義路線は逆転し、あるいは先祖返りしつつあるといえよう。このことは当然当時のソ連モデルの時代、第一次五カ年計画期のソ連モデルの時代を再評価する潮流になるわけで、そうした潮流が中国社会の内部に内在的に広がっていることを、われわれは見ておく必要がある。

こう考えてくると、今日の非毛沢東化が意味するところは明瞭であろうが、それでは一体こうした路線は今回の党大会において、具体的にどのような形で固められつつあるのか。それはこうした非毛沢東化を政治とイデオロギーの上部構造で進めてきた今日の鄧小平路線として固められつつあるのだが、鄧小平が一九七八年十二月の中国共産党第十一期三中全会以来築いてきた方向が、今回ほぼ全面的に確認されたといっている。

とに示されるように、今後は総書記を要とした書記処（書記局）中心の、きわめてビュロークラティックな体制のもとで政治を行なっていくであろう。

こうした状況下でありながら、なお今回の第十二回党大会で、葉劍英、李先念などの長老を政治局にとどめ、すでに政治的影響力を全く失っている華国鋒を中央委員会にとどめたのは、そしてまた陳雲、彭真その他劉少奇ラインにつながる旧実権派政治家も依然として第一線に残り、中央政治局それ自体には大きな変化がなかったのは、すべての中で鄧小平・胡耀邦指導部の恩恵どおりに動いたとはいえない側面があるといえ、それをわが国が「マスコミ」の多くが見るように、鄧小平の政治戦略の挫折、ないしは鄧小平政治への抵抗の強さを見るのは当らない。わが国のマスコミは、従来、中国報道で限報をくりかえしてきたために、今日「真」に驚いてなまなまを吹く」の感なきにしもあらずだといえよう。

今回の大会で選出された二百名前後の中央委員の約半数は新しい中央委員であり、重要なポストには胡耀邦とともに長年中国共産党の外郭団体である共産主義青年団を文えてき

今回の第十二回党大会の諸文献がしばしば三中全会の重要性について触れているのは、まさに三中全会が鄧小平・胡耀邦体制を内部的に固める大きな転換点になったことを意味している。

官僚独裁体制の強化

この三中全会当時は、党内には依然として文革派の影響も残り、華国鋒も党主席の地位を維持していたが、一方ではこの三中全会を契機に五〇年代前半に経済を担った陳雲らの旧幹部が大量に復活し、鄧小平路線をほぼ固めることができた。

こうした状況の中で、葉劍英、李先念のように、いわば周恩来系のリダーたちも存在したとはいえ、全般的には劉少奇路線の脱却と旧実権派つまり鄧小平、胡耀邦、万里、趙紫陽（彼の立場はちよつと微妙である）を中心とする政治潮流と、鄧小平路線の助けをかりて復活した陳雲を中心とする経済人脈、陳雲、譚震林、薄一波らの潮流が大きく合流して中国政治をリードしていくことになったといえよう。

やがて、昨年六月の中国共産党第十一期六

た人材が多数登用されている。このことはビュロークラティックな新しい官僚独裁体制にふさわしい人的新陳代謝が行われていることをも示している。

不再帰点にきた中国

今日の中国の政治の中には、鄧小平主導のあまりにも急激な非毛沢東化路線に対する抵抗がたしかに存在する。中国社会の内部にはポスト鄧小平時代への不安と、今日の鄧小平路線に対する不信の動きがある。しかし、これら反鄧小平的な勢力なり動きなりが、組織的・官僚的な独裁体制を強化しつつある鄧小平・胡耀邦指導部を覆すだけの力になり得るかといえ、これはとても無理だといえよう。もはや毛沢東時代の再来はあり得ず、文革型の政治を繰り返すことはできないという歴史的・社会的趨勢に現在の中国指導部は乗っけているのである。

この点ではや中国の政治はポイント・オブ・ノー・リターンの地点をすでに越えているのであり、問題はまだまだ山積しているにせよ、鄧小平・胡耀邦体制が徐々に固められつつあるのは疑いもない事実だといつてよい

中全会では、華国鋒を党主席の座から引きずりおろすことに成功し、さらに非毛沢東化を文番の上でも確認したきわめて重要な決議、「建国以来の党の若干の歴史的問題に関する決議」を採択することができたのである。

こうして党中央レヴェルでは人的にもイデオロギー的にも非毛沢東化を実現したものの、中国共産党員三九〇〇万人の中にはなお五〇パーセントに近い文革時の入党者がいる。鄧小平・胡耀邦体制にとっては、次のステップとして中国共産党全体の非毛沢東化を図るといふ重大な政治的任務があった。今回の党大会が従来の党主席制を廃して総書記制を新設し、同時に党中央書記処の権限を著しく強化したことは、このような中国共産党全体の組織的な非毛沢東化の推進にもつともふさわしい体制をつくったことだといえる。

つまり従来の中国の政治は、何といつてもカリスマ的指導者であった毛沢東、あるいは国家の顔として親しまれていた周恩来というような領袖のもとに、党中央政治局つまり、ポリティビュローウが存在し、そこが政治の中心だったのだが、最近の中国共産党はより官僚的・組織的な体制の党になってきているこ

だろ。

一九七七年夏、奇跡的に二度目の復権を果たした鄧小平は次のような発言をした。自分の体は健康そのものでどこも悪くない。あと八年から十年は大丈夫だ——と。彼の発言したである。つまり一九八五年ないし七年ぐらまでは自分が中国の政治を見るのだというこどであり、鄧小平にとって現在はまだまだその政治戦略の途上なのであって、あと三年ないし五年の政治的猶予期間があることを意味している。鄧小平としてはみずからの死後に万全を期するため、またこれまで中国では最高指導者の死後、政治がどのように変化しかをあまりにも近くで見続けてきているだけに、彼はみずからの死後再び政治が激動し、自身が進めてきた政治戦略が覆されることのないためにも、決して「ま無理すべきではないことを知っている。そのことが、今回の第十二回党大会で名目的にも華国鋒を残し、葉劍英、李先念ら長老の地位を現状維持せしめたことにつながるのではないかと私は考えている。従って今回の党大会がドラマチックな人事の一新に至らなかったからといって、鄧小

平戦路のつまずきだと思えるのは早計である。

それどころか、全体的な潮流はまさに鄧小平・胡耀邦路線としての党官僚独裁体制の強化の方にあるといつてよいであろう。言うまでもなく、こうした党官僚独裁体制は中国社会の中のさまざまな欲求不満分子や、あるいは西側諸国に傾斜したり、いわゆるブルジョア思想に毒された分子を、今後徹底的に抑圧していく立場をとるのである。他方、毛沢東政治のシンボルであった人民公社を解体・再編することによって中国社会の生産単位をいわば農業集団化時代に逆戻りさせていくことになろう。それによって過度に集中化された人民公社による生産の社会化を逆転させ、生産力を向上させるためには、より集団化傾向の低い、それだけに個人の選択や個人の物質的利益が直接反映されるような農業形態を考えていくことになるであろう。

同時にそのことは中国の社会主義建設路線がよりソ連モデルに近づくことを意味し、そうした党官僚独裁体制の性格を反映して、よりオーソドックスな社会主義的対外路線が打ち出されてくるであろう。ここにわが国にとっての大きな不安があることはいうまでもな

5。

転換した中国の世界戦略

以上で分析したような中国共産党の新しいリーダーシップの方向およびその体質からすると、中国の世界戦略と対外路線は大きく変化してゆくものと思われる。早くも七八年十二月の三中全会以降、徐々に進んできた鄧小平・胡耀邦体制の確立、つまり非毛沢東化の進捗に伴って中国の世界戦略はすでに変化しつつあったのであり、そのことが今回の第十二次大会の胡耀邦報告における西側諸国、特に日本への敵しい姿勢と中ソ関係改善への意思表明によって、いわば再確認されたといつた方が正しい。

このような見方はわが国でも、国際的にもきわめて少数であろう。中国が七九年のアフガニスタン危機、あるいは米中国交正常化という国際環境の中で、七八年夏に日中平和友好条約を締結して以来、激しく「覇権主義」、つまり反ソ政策を唱えていたことにとらわれて、中国は対ソ対決姿勢を強化してきていると、一般には見られていた。わが国内においてもそうした意見が支配的であったし、私自

身、今夏、西ドイツのザールブリュッケンで行われた「現代中国に関する国際会議」でアメリカをはじめとする世界の第一線の中国研究者と意見を交えてみても、そのほとんどは、中国の世界戦略の變化などを視野にはいれておらず、従って中ソ和解についても依然として懐疑的な意見が多かったのである。

しかしながら、毛沢東の国内政治を否定し、「毛沢東思想」を根本的に否定しておきながら、毛沢東の世界戦略ないしは対外政策は正しかったというような評価が中国政治の体質上、あり得るだろうか。今日の中国が目指すのが非毛沢東化であるなら、当然、毛沢東の対外政策も否定されてゆかざるを得ない。そして毛沢東の対外政策の最も象徴的なあらわれが対ソ対決であり、中ソ対立をもたらしした毛沢東型世界戦略であった。だが今日、中国共産党のリーダーの体質が五〇年代初頭にまで戻り、基本的に鄧小平路線ということになると、ソ連に近いといふことは、決して許容できないことではなくなってくる。

もとより鄧小平、鄧小平、あるいは彭真といったようないざずれも実権派の指導者が、イデオロギー論争としては、ソ連共産党のスー

スロフ政治局員らと激しくわたり合ってきたことに示されるように、実権派の面々はソ連と論争してきた人々である。しかしながらこれら実権派の対ソ認識の根本はあくまでもイデオロギー論争という次元での対ソ批判であって、世界戦略としてソ連と対決することでは決してなかったのである。

親ソ派グループの復権

こうした鄧小平路線を中心に据えて考えると、より親ソ的な路線である彭德懷グループの立場はどのようになるであろうか。かつて文化大革命開幕期の一九六五年十一月、後に「四人組」の一人として糾弾されることになった姚文元は、上海から実権派の牙城・北京を攻撃するために、明代の歴史劇「海瑞罷

官」を批判する論文を掲げることによって、文化大革命ののろしをあげた。この明代の清官、海瑞はわがままな皇帝を諫めようとして失脚したのだが、この海瑞が実は彭德懷のことであり、党内の実権派は彭德懷を復権させようとしていると批判され、これが文化大革命の発端になったのである。

ところが今日の中国では、もしも政治家の人氣投票を行えば彭德懷が一番人氣があるのではないかと思われるほど、彭德懷に対する評価が高まっている。民衆の気持も彭德懷に大きく傾いている。彭德懷はいうまでもなく、一貫して内外にわたる毛沢東戦略に真正面から対抗してきた人物だからである。人民公社、「大躍進」政策をめぐるのは、あの一

たといわれたとおり、毛沢東の人民公社政策は誤りであり、「大躍進」政策をやつたら中国の経済はめちゃめちゃになるといふ意見を、正々堂々、毛沢東に対する手紙と党中央委員会に対する意見書によって提起し、その意見に怒った毛沢東はこれ以上の下品な言葉はないほどの言辭で彼を口ぎたなく罵り、そして彼とそのグループを失脚させたのである。彭德懷はまた朝鮮戦争当時の司令官として、中国の農民ゲリラ型の軍隊を近代化しなければ駄目だといふ認識を支えられ、この点でもいわばゲリラ・メンタリティーに立脚した毛沢東と対立し、軍の近代化論争を提起して敗北していった。

こうした経緯があるだけに、毛沢東が間違っていたということになった今日、その反動

新刊の春秋藝文

日本を破滅から救った苦惱の二三〇日間

宰相 鈴木貫太郎

小堀桂一郎

海軍の昭和史 提督と新聞記者

海軍日記 最下級兵の記録

野口富士男

杉本 健

米内光政・山本五十六・井上成美らの将星の素顔を元朝日新聞記者が語る ●1300円

密かに書き綴った日記をもとに、帝國海軍兵士の日常を再現した、幻の文庫！ ●1200円

天皇と肝煎相照した老將が、敵味方を欺きながら、戦争終結という大ドラマを演出した知られざる姿を描く傑作評伝 ●1300円

として当然、彭徳懐こそ最もすぐれた指導者だという評価が高まりつつあるわけで、人民出版社は昨年暮に「彭徳懐自伝」を出版し、いまそれが大変な人気を博している。この事実はまさに今日の中国の政治潮流の一つの反映だといつてよいであろう。

従って、当時彭徳懐グループとして失脚していった多くの政治家たちは、今回の第十二回党大会の人事に明らかなように、ほとんどが復活してきている。反面、かつてあれほど人気の高かった周恩来の影が、このところ中国内部ではしぼんできている。

周恩来は、晩年はともかく、当初は毛沢東に加盟し、文革に賭けたからであろう。

だが驚くなかれ、こうした彭徳懐グループのみならず、もっと直接的にソ連と結んだ高崗グループの人たちまでが、最近復活しているのである。高崗事件については私自身、詳細に分析したことがあるが（拙著『中ソ対立と現代』第五章「高崗事件と中ソ関係」、中央公論社、一九七八年、参照）、建国以来最初の深刻な粛清事件であり、東北に独立王国をつくろうとしたという罪状で中国共産党有数のリーダー高崗らが一九五四年に失脚して

いった事件である。ところが、この高崗事件に連座した重要な人物が、なんと最近復活し、この度の第十二回党大会では中央委員に選ばれたり、新設の顧問委員会委員になったりしている。郭峰・遼寧省第一書記、趙徳華・黒竜江省第一書記らがそうである。

これらにきわめて象徴的な出来事であるが、劉少奇路線を真ん中に据えようと、まぎれもない親ソ派さえ、政治的に復讐し得ることを意味するのだといえよう。このような事実が、中国の内政の変化がソ連を基軸にして大きく動いていることを端的に示している。

だが同時にそればかりか最近では中国外務省その他の行政レベルでも、いわゆる親ソ派や完全なスターリン主義者だけでなく、いわゆる「知ソ派」のリーダーたちが著しく台頭している。その最も象徴的な例は、去る三月二十六日、ブレジネフ・ソ連共産党書記長がタシケントで行なった中ソ和解への呼びかけを中国側で受けとめ、「ブレジネフ発言を留意する。そしてソ連の実際行動を見る」と言明した外務省新聞局長（当時）の錢其琛であろう。彼は一九二〇年代生れの中堅幹部であるが、長いモスクワ駐在の経験があり、在ソ

中国大使館においては政策担当であった、いわゆるロシア・サービスである。彼はこの五月、國務院の改革により外務次官に昇格している。

秘かに進められた中ソ接触

さて、わが国が中国との教科書問題に翻弄されているまさにそのとき、中国側は、ひそかに于洪亮・中国外務省ソ連東欧局長を訪ソさせ、来るべき中ソ和解へのステップを刻んでいたのであった。この点を私はすでに先月、別の文章で指摘しておいたが（拙稿「活かされない日中交渉の教訓」、『中央公論』一九八二年十月号）、中国当局は、于洪亮訪ソの重要性を万里副首相がこの九月十五日に明らかにした。それに気づかず、何とか教科書問題で中国の政策に合致するようにと努力していたわが国政府・外務省の姿は、ある意味ではあまりにも滑稽だといえよう。去る四月に鄧小平・胡耀邦両首脳が訪朝して金日成主席と懇ろに会談していたことなど、こうした大きな変化が起り得ることを日本政府・外務省には予想もつかなかったであろう。

最近の中ソ関係を顧ると、于洪亮の訪ソの

みならず、ソ連からはソ連外務省極東第一部

長M・S・カービツアの訪中のみならず、さらにソ連外務省顧問でカービツアとともにソ連における中国研究の代表的なリーダーでもあるチフピンスキー中ソ国境会議顧問なども北京を訪れている。これらの中ソ双方の面々は、中国語もしくはロシア語でお互いに話ができる人たちである。

しかも、こうした状況の中で去る二月に胡耀邦は「毛沢東時代のような馬鹿げた中ソ対立のために、ソ連について学ぶことを忘れてしまった。ロシア語も勉強しなくてはならなかった」旨発言して、ロシア語世代の新しい育成を呼びかけていた。そして、鄧小平系列の雑誌とも言われる香港の「七〇年代」は、この七月号で、ついに「ソ連に学ぶ」という論

文を掲げている。

このような対ソ関係改善への大きな潮流の中で、このところさまざまな出来事が中ソ間に発生している（詳しくは拙稿「和解」へ動き出した中ソ関係）、『朝日ジャーナル』一九八二年七月九日号）。こうした潮流の中で、今回の党大会の胡耀邦報告における対ソ関係改善提案があったのであり、今回の胡耀邦の発言は決して突然のものではないことを、われわれは知らなければならぬ。

中国はこの間「覇権主義」反対を強く唱えてきた反面、国内政治の内在的な変化に従って、すでに中ソ和解は徐々に始まっていたのである。そのことは同時に、中国の世界戦略が根本的に転換しつつあることを意味していた。従来のように西側諸国、特に日本やア

メリカとの接近を中心とした中国の世界戦略は、このところまず「第三世界」との連携、さらには中ソ和解による社会主義共同体としての再編成に向けて大きく転じつつあったといつてよいであろう。

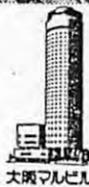
こうした中で、中国は昨年来、社会主義諸国にとっては決定的な問題である、ポーランドの「連帯」の動きに対して、ついに一貫して否定的な態度を取ったのであった。これはたんに中国内部の反体制勢力に対する懸念があったということのみならず、結局はそうした根本的な問題を提起され、踏み絵をつきつけられたときに、中国は社会主義の立場を堅持したということである。この事はソ連を大いに満足させた。

こう見てくると、中国の世界戦略は再び変

OSAKA MARUBIRU

グッド
モーニング

便利な立地と
安らぎのサービスが
時間に心に
大きな余裕をお届けいたします。
大阪での一日、
快適なスタートをどうぞ。



大阪第一ホテル

大阪市北区梅田1-9-20 TEL.06(3)341-441(KIX)

- ご宿泊の予約は営業所へ
- 東京 ☎(03) 501-5161
- 札幌 ☎(011) 241-5605
- 仙台 ☎(0222) 65-4327
- 金沢 ☎(0762) 23-4821
- 名古屋 ☎(052) 203-1301
- 大阪 ☎(06) 341-3200
- 広島 ☎(082) 247-0588
- 福岡 ☎(092) 714-5801

Osaka Dai-ichi Hotel

ったといわざるを得ない。私は従来から国際環境は、ほぼ十年周期で変るといふ仮説を立てているが、今回の動きを見ると、米中接近、日中国交樹立から十年、日中友好、米中接近の蜜月時代は過ぎ去ったといつてよいであろう。中国は西側諸国から吸収すべきものを十分吸収し、これ以上は吸収し切れない、これ以上は無理だということを再認識しながら、社会主義諸国間の相互依存性、類似性、共通性、そしてあらゆる社会システムの互換性に、再び気づきはじめているのではなからうか。

ソ連モデルへ回帰する中国

最近、中国国内で行われた経済に関するシンポジウムでは、ソ連モデルを讀み、ソ連モデルへの回帰こそが正しいということが結論になったといわれている。彼らのいう「四つの現代化」を数字で表わせば、今二五〇米ドル前後のGNPを今世紀末までに一〇〇〇米ドルにするというのであり、日本はいかにおよばず、台湾や韓国、シンガポールなどの高成長に比べると実に低い成長率であり、そのような低成長であれば必ずしもアメリカや

日本に接近して先端の技術などを導入する必要はないわけで、やっぱり社会主義のベースでいった方がいい、ということなのではなからうか。あまりにも差のある日本に学べといつてはみたが、社会のシステムが社会主義であるところへ一貫システムの全自動化されたコンピュータで操作される鉄鋼プラントなどをもってきても使い切れないし、使ったところで労働節約的なものになって、あり余る労働力が逆に社会問題になってしまふ。その辺の事情がわかってきたのであろう。

こうして見てくると、今回の第十一回党大会はそうした中国の世界戦略の転換を、最終的に確認したことによって、今後中国は対ソ和解への動きをさらに進め、場合によっては、国際共産主義運動の再編をも含めて、新しい社会主義プロレタリアの形成に向う可能性もあるように思われる。

こうして、中国の将来に関しては結局、中国が共産党政権の国家であることには、激しい中ソ対立にもかかわらず、当面変りはないということを確認させたのである。

アメリカ側としても、イグ国防長官（当時）の訪中した昨年六月が、米中関係の一つ

のピークであったように思われる。中国を戦略的に重視する余り、中国をソ連に対する対抗勢力、カウンター・ウェイトとして軍事的にも育成し、出来れば中国の武器体系をアメリカ型のものにしてしようと提案したときに、そうした踏み絵を突きつけられた中国は、結局それに乗ってこなかった。私は、米中関係の冷却化は、台湾問題は表面的なことであり、こうした米中間の根本的なところでの食い違いが、結局は一つの「歴史の教訓」として中国側に受けとめられ、それ以後中国はアメリカに対して、かなり厳しい姿勢に出るようになったのだととらえている。

日本として例外ではない

日中関係にはそもそも大きな異質性があり、非対称性が存在する。それは冒頭に述べた一人当りのGNPが中国が二五〇米ドルなら日本は約一万米ドルという、四十倍もの差があることに明白であり、その異質性、非対称性があること自体がさまざまな摩擦をもたらすのである。考えてみれば、かつて日本が六〇年代の経済成長のうちにアジアに大きくプレゼンスを拡大しようとしたとき、中国

は激しい「日本軍国主義」批判を行なった。そして今日、七〇年代の試練を経て八〇年代に差しかかると、世界的に、西側諸国、社会主義諸国ともに経済的にも行きづまっている中で、一人日本が、低成長とはいえかなり順調に、従来にも増してその影響力を拡大しつつあることは、中国にとつては潜在的にきわめていら立たしいことなのである。

そうした中で中国が再び対日批判を行うのも、中国サイドからすれば、それはまた避けられないことであるような気もする。しかもそうした中国の対日批判それ自体もきわめて戦略的なものであつて、かつての「日本軍国主義」批判が米中接近への政策転換の途上行われたように、今回の日本「軍国化」「右傾化」批判が、ついこの間まで中国自身そうし

た「軍国化」「右傾化」傾向を助長していたにもかかわらず急速に起つていくことは、中ソ和解という従来の政策からの根本的な転換の中で、中国がいま自らの立場の「革命性」を誇示するためにも必要であつたといえるであらう。

そうであるだけに、私たちは日中関係を、目先の利益や小手先の対応を離れて、より長期的な展望の中で考え、そうした異質性、非対称性に耐え得るような理念と政策を打ち立てていかなければならない。

結局は中国も社会主義国家であり、中国共産党が指導する「戦略国家」であることを確認せざるを得ないのであつて、そうした基礎の上に、日本として何が可能であり、何が不可能であるかを見きわめた対中政策を形成し

ていく必要がある。過去十年の日中友好ブームといふものは、そうした日中間の異質性や非対称性、または社会体制やイデオロギーの違いをしばしば忘却させてしまい、「日中友好子々孫々」「一衣帯水」といった情緒的なスローガンのもと、日中関係の近百年をとれば、むしろ非友好の時代の方が長かつたことさえ、忘れられたような対応を、日本自身が行なってきたのであつた。

今後の中国がどのように変化しようとも、中国の変化に動かないだけの主体的な中国認識と、それに基づく長期的な展望をもつことが差し迫って必要であることを、最近の中国政治の動きと、いわゆる教科書問題は、われわれに改めて教えている。

京名物

鼓月

京菓子処

京都四條烏丸

電話(075)221-1641